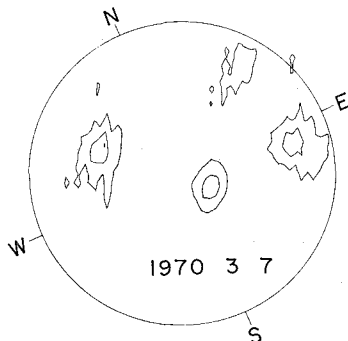
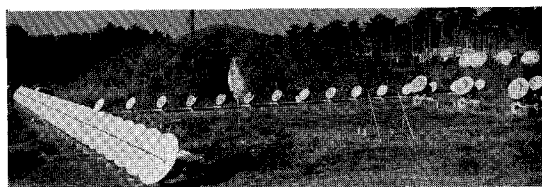


◇ 6月の天文暦 ◇

日時	記	事
4 11	朔	
5 12	水星 西方最大離角	
6 12	芒種 (太陽黄経 75°)	
10 5	月 最遠	
12 13	上弦	
13 3	天王星 留	
15 18	木星 月の6°N通過	
19 21	望	
22 3	月 最近	
5	夏至 (太陽黄経 90°)	
24 9	木星 留	
26 13	下弦	



電波太陽写真儀 (9.4GHz ラジオヘリオグラフ)

豊川には表題のT字型干渉計の他に、高速走査ができる電波太陽活動指数計があるが、後者については天文月報1968年10月号に少し詳しく述べたので、ここでは、ただカルグーラの80MHzヘリオグラフと並んで最もデータアウトプットの大きい装置であるということをつけ加えるだけにする。

さて、この電波太陽写真儀の特長は分解能の高いこと、シャッタ速度の速いことであるが、最大の特長は値段の安いことである。つまりこれは特別の予算をもらわずに作られたもので、その建設のために田中、柿沼両先生をはじめ、研究室の人達の長年にわたる経験となみなみならぬ努力の成果といえよう。その一端を列記すると、

- 1959年4月 8素子干渉計完成
- 1964年6月 16+2素子複合干渉計完成
- 1966年7月 32+2素子複合干渉計完成
- 1969年7月 32+16素子T字型干渉計完成

となる。現在は総計50個(32+2+16)のパラボラがあるが、1959年以後漸増設された歴史をそのままに新旧

様々のパラボラ、導波管から構成されている。だから、指数計の次にこの写真儀を見せると大方の見学者は随分ガタガタの装置だと印象を持つらしい。しかし、手造りの器械というもの面白いもので、導波管のどの部分の『まがり』が弱いとか、ロータリージョイントがパンクしやすいとか、大体一通りの故障が出尽してしまうと、今度はデータを見ただけで、立体回路のおよその故障箇所はわかってしまう。いわば、気心の知れた女と暮しているようなもので、顔がちょっと位まづくても、結構楽しくやってゆけるのに似ている。

今のところは一日4時間の観測時間のうち、約3時間半を複合干渉計として、半幅値1:1および0:4の一次元走査を行ない、南中直後の約20分はT字型干渉計にあてられている。カットの図が『電波写真』で、輝度温度は約二万度ステップになっている。中央の電波源はバーストの名残りで、電波源が小さく、干渉計のビームの型がそのまま出ている。他の三つはS成分で、その電波源は前者に較べて大きいことがわかる。(観目信三)

